夏とおじいさん

小川未明

青空文庫

ある街に、気むずかしいおじいさんが住んでいました。まったく、独りぼっちでおりましたけれど、欲深なものですから、金をためることばかり考えていて、さびしいということなど知りませんでした。

「おじいさんは、おひとりで、おさびしくありませんか？」と、独り者のおじいさんの身の上を思って、なぐさめるものがあると、

「仕事にいそがしいから、そんなことは考えませんよ。」と、おじいさんは、さびしいとか、さびしくないとかいうのは、閑人のいうことだとばかりに返事をしました。

「それは、お元気で、なによりけっこうなことです。」と、たずねた人は、金がもうかれば、さびしくないものとみえる、さすがに、金持ちはちがったものだと思いました。

おじいさんは、雇い人を手足のごとく使いました。雇い人たちは、おじいさんの気むずかしやを知っていますから、せっせといいつけどおり働いたのです。そして、自分の思ったように物事がうまくゆけば、にこにことして、おじいさんは、きげんがよかったけれど、うまくゆかないときには、

「おまえは、気がつかん、ばかだから。」といって、がみがみしかったのであります。

雇い人は、たまりかねて、

「あんなわからずやには、罰があたればいい。」と、思っていました。ところが、おじいさんはリューマチの気味で、夏のはじめごろから、手足がよくきかなくなりました。

「とうとう、神さまが、罰をおあてなされたのだ。これからは、私どもにもやさしくしてくださるだろう。」と、雇い人たちは、いったのであります。

ところが、その反対で、体こそよく自由はきかなかったが、ますます口やかましくなって、それに自分が不自由で、思うようにならぬところから、かんしゃくを起こして、使っているものに、小言をいったのです。

それでも、みんなは、「病人だから、だまっておれ。」と、我慢をしていました。

日にまし、あつくなると、はえや蚊が、だんだん多く出てきました。はえは遠慮なく、おじいさんのはげた頭の上にとまりました。

「この畜生め。」といって、おじいさんは、うちわを頭の上にやって、はえをたたこうとしました。はえは、すばしこく逃げて、また、おじいさんがじっとしていると、頭の上にきてとまりました。

「ふといやつだ、おれをからかっているな。」と、おじいさんは、顔を赤くして怒りました。しかし、はえのことですから、怒ってみるだけで、どうすることもできません。

また、晩になると、蚊がやってきて、おじいさんを、ちくちくと刺しました。

「おれが、手足がきかないと思って、蚊までがばかにする。」と、おじいさんは、怒ったのであります。

はえや、蚊に対する腹だたしさが、つい雇い人のほうへまわってきましたから、たまりません。せめて、この夏の間なり、涼しい山の温泉にでもまいられたらといって、おじいさんにすすめました。

おじいさんは、いい考えだといって、喜ぶと思いのほか、

「仕事のいそがしい体で、そんなところへゆけるものか？　私は、あのビルディングの五階の事務所で、夏を過ごすつもりだ。」と、

答えました。

「なるほど、それは、いいお考えでございます。」と、温泉行きをすすめた雇い人は、頭をかいて下がりました。

おじいさんは、いよいよビルディングへ移って、高い五階の室で住むようになってから、はたして、はえも、蚊もこなければ、涼しい風がはいって、それはけっこうでありました。

「なぜ、早くここへこなかったろう。」と、おじいさんは、大喜びでしたが、雇い人は、ますます手足のごとく使われて、上がったり、下りたりするので、ほんとうにやりきれなくなりました。ちょうど、そのおりのことです。ビルディングのエレベーターに故障ができて、止まってしまった。その修繕には、五、六日間かかるそうです。雇い人たちは、頭を集めて、

「こんなときにでも、おじいさんを困らして、平常、手足のように働いている、みんなのありがたみを知らしてやれ。」と、相談しました。

それで、みんなが、仕事を休んでしまうと、体の自由がきかないおじいさんですから、まったく困ってしまいました。

「不埒のやつどもだ。よくも、私をひどいめにあわしたな。」と、おじいさんは、怒りましたけれど、よく考えれば、自分が無理だったので、いつでも、みんなが、自分のどんな命令でもきくものと思ったからです。

「そうだ。おれは、もっと謙遜にならなければならない。そして、人を信じなければならない。この世の中は、おたがいに助け合わなければならぬところだ。」と、悟りました。

おじいさんは腹がへると、かごの中へ、紙片に字を書いて、それといっしょに銭をいれて、細ひもで、するすると五階の窓から、下の通りへおろしました。その紙片には、

「もし、このお金で、パンを買って、この中へいれてくだされればしあわせです。そして、あなたの手間賃もお引きください。」と、書いてありました。

おじいさんは、しばらくして、かごを引き上げると、その中には、できたてのやわらかなパンがはいっていました。そして釣り銭も、ちゃんとはいっていたのです。

赤々とした、夏の太陽は、高いビルディングと、人の歩む白い路をいきいきと彩り、照らしていました。おじいさんは、正しい道を悟ったばかりに、それからは、雇い人にも尊敬され、ひとりぼっちでさびしくなく、体がきかなくても、何不自由なく、暮らすことができたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　8」講談社
　　1977（昭和52）年6月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第6刷発行
底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館
　　1932（昭和7）年3月
初出：「國民新聞」
　　1931（昭和6）年7月12日
※表題は底本では、「夏《なつ》とおじいさん」となっています。
※初出時の表題は「夏とおぢいさん」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：津村田悟
2018年7月27日作成
2018年9月29日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏とおじいさん

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/